（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（ 法 学 ）	氏名	朱 暁凡
論文題目	政党政治家としての田中角栄－日中国交正常化に至るまでの政治的台頭 一九四七～一九七二		

（論文内容の要旨）

本論文は、日中国交正常化を成し遂げた田中角栄に注目し、日中国交正常化実現に至るまでの、田中の対中構想や政治手法と、政治的台頭の過程等を明らかにしようとしたものである。

「はじめに」では、田中に関する研究を整理し考察した上で、日中国交正常化を成した遂げた田中を全体的に考察するために、四つの視点から検討する。それは、第一に、田中の対中構想と政治手法。第二に、諸政策を通しての田中の政治的台頭とその過程。第三に、田中と彼の最大のライバルであった福田赳夫の政治指導や政策、とりわけ中国問題における捉え方の違いに焦点を当てることによって、田中が首相の座に就くことができた過程と理由。第四に、田中の選挙活動とその特徴、である。

第一章は、政党政治以前の田中角栄について考察する。すなわち、田中の幼少期と青年期を検討すると、この時期を通して人間を信頼することを教える恩師を得たことは、後に政治家として大成していくのに大きな財産となった。一方、田中の軍人時代における苦い戦争体験は、田中に中国への贖罪意識やソ連に対する警戒感を抱かせる起点となり、後の田中の「日米中の二等辺三角形」構想の形成にも大きな影響を及ぼしている。また、田中が一九四六年の第二二回衆議院総選挙での落選から教訓を得て、翌年の総選挙で当選した後、一九五二年の総選挙までに、どのような過程を経て選挙基盤を安定させていったかということにも言及している。

第二章では、吉田茂内閣、岸信介内閣、池田勇人内閣における田中の政治指導について述べている。第一節では、吉田内閣における政治家としての田中の成長に言及している。田中は保守政党である旧進歩党や保守・中道政党である旧民主党を経て、「保守本流」となる自由党の吉田の流れに潜り込み、権力の階段を上がっていくことになった。また、「道路三法」の成立過程における田中の決断力、剛直果敢な仕事ぶり、政治的発想力や官僚操縦を内容とする政治手法も、特筆に値する。最後に、田中・大平の友情や、田中が池田派ではなく、佐藤派に入った理由についても分析している。第二節では、岸内閣において、田中が、郵政大臣として電波管理局の非効率的な免許交付案を差し戻し、テレビ局への大量予備免許の交付という未解決の難題を、政治決断により解決したことを示した。第三節では、池田勇人内閣における田中の池田との協調について言及している。第二次池田内閣における田中の政調会長就任が、自民党の権力の中枢に入って行く第一歩であった。対中構想においては、田中はＬＴ貿易を順調に進められるように尽力した。貿易面からまず日中の関係改善を図

ろうという池田の考えを、田中は深く理解していたのである。

第三章は、第一次、第二次佐藤栄作内閣における田中の政治指導について述べている。第一次佐藤内閣において、田中は、社会開発政策や財政政策において、佐藤・福田と政策的距離を置いた。佐藤第一次改造内閣の改造人事によって、田中は同内閣と自民党権力の中枢に残り続けたものの、「黒い霧」問題の責任を問われ、一時中央政界から離れざるを得なかった。しかしながら、田中は、『都市政策大綱』の作成を通じて、自民党内外において評価を高め、幹事長に返り咲いた。『都市政策大綱』の作成過程で、田中は官僚を使いこなし、円熟味を増していった。

第四章では、第三次佐藤栄作内閣における、日米繊維問題を解決した田中の政治指導について述べた。まず、日米繊維問題が政治問題に発展した経緯を概観した上で、大平正芳と宮沢喜一の両通産相の問題打開への努力と行き詰まりを考察する。大平と宮沢の行き詰まりを受けて、通産相に就任した田中は、アメリカ側に譲歩を迫ろうと粘り強く交渉し、他方では、自民党内や繊維業界に丹念な根回しをし、日米政府間協定を結ばせ、繊維業界へ救済融資を実施させた。このように、日米繊維問題を解決したことを通して、田中はポスト佐藤の有力候補として台頭することになった。

第五章は、日中国交正常化気運の高揚と田中の対中構想について述べている。第一節では、佐藤四選をめぐる政治情勢を分析する。第二節では、米中接近後の極東の国際秩序を考察した上で、それに対する田中の捉え方の特徴を検討する。続いて、田中が「日米中の二等辺三角形」構想を形成させた背景として、極東における流動的な情勢と、田中の中国の共産主義に対する捉え方について分析を行った。第三節では、日中貿易の障害となっていた日本輸出入銀行資金の再開問題に着眼点を置き、それをめぐる田中と福田の考え方の相違を明らかにする。第四節では、大平の動きと田中―大平ラインの構築とその経緯を検討する。

第六章は、田中角栄内閣の成立とそれに対する中国側の対応について述べた。第一節では、田中が自民党総裁選で勝利するまでの経緯について考察し、中国問題をめぐる対応が、田中と福田の明暗を分けたもっとも重要な原因であったとことを確認した。第二節では、田中による組閣工作について検討した上で、田中が日中国交正常化の実現のため、用意周到な政治手法を用いたことを示した。第三節は、中国側の田中内閣成立に関する動きについて述べた。

第七章は、日中国交正常化交渉への田中角栄の政治指導について論じた。第一節では、日中国交正常化をめぐる自民党内の紛争を考察し、その過程における田中の政治指導を検討した。第二節では、竹入訪中の政治的過程を中心に検討し、日中共同声明案をめぐる中国側の意向を探るために、竹入義勝をはじめとする野党党首の協力を取り付け、非公式なルートを駆使して水面下の外交を展開させた田中の政治指導について検討した。第三節では、日米首脳会談と台湾への特使派遣について検討する。対米緊急輸入の決定によってアメリカの不満を和らげ、その見返りとして、早期の日中国交正常化についてのアメリカの

厳しい注文を封じ、対中交渉に臨む良好な国際環境を創出した田中の政治指導を明らかにする。また、田中が、親台派の椎名悦三郎を特使として台湾へ派遣し、台湾に最後に田中なりの誠意を示した政治指導についても言及している。第四節は、中国指導部による中国における田中訪中の準備と、そのための幹部の教育、国民説得工作について考察した。第五節では、日中国交正常化交渉における危機的状況を、卓越した政治家として見事に克服した田中の対応を検討した。さらに日中国交正常化後の日中関係について述べた。

最後に、「おわりに」おいては、本論文全体の総括として結論を整理し、今後の見通しを述べるとともに、今日の日中関係を改善へと導くために、政治家のあるべき姿を示唆した。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

田中角栄の研究は、金権政治や自由民主党の利益誘導政治の推進者としての視角で論じることから始まった。日中国交正常化についても、大平正芳外相や外務官僚の役割が強調され、田中は中国ブームを利用して首相になっただけで、外交的には大きな役割を果たしていないとも評価されていた。このため、中国側の政治的な田中評価とは、大きな隔たりがあった。

近年、日中国交正常化における田中の一定の役割を評価する研究が発表されるようになった。しかし、日中国交正常化を成し遂げた田中を正当に評価し、そこに至る田中の軌跡を伝記的に実証的に描いた研究は、皆無であり、本論文は、田中についての初めての本格的な伝記研究である。

本論文は、田中や彼に関係した人々の回想録・日記や日本・中国の新聞記事などの他、日本・中国の外務省の史料館や公文書館等の所蔵資料等、膨大な史料を使い、それらを緻密な論理で組み立てている。

本論文は、田中がLT貿易の推進など池田勇人内閣期から日中関係の改善に強い関心を持ち、首相として情熱を持って日中国交正常化を実現したことを明らかにした。これは、田中が東アジアにおける平和的国際環境を整えることによって、日本の発展を図る政治構想を持っていたからであった。田中は中国ブームが生じたのでそれに乗ったにすぎない、とする従来の解釈に変更を迫るものである。

さらに本論文は、田中が高度成長期に対応する政策実行能力を示すことで、自民党内で台頭し、首相となり、日中国交正常化を成し遂げる権力基盤を築いたことを明らかにした。田中が能力を示したのは、テレビ免許、財政政策、住宅・都市政策、日米繊維摩擦の解決等である。逆に田中のライバルであった福田赳夫は、財政政策や日米繊維交渉で失敗し、首相レースで田中に遅れをとることになった。台頭するために田中が膨大な資金を獲得する金脈システムを作り上げたことは、本論文も否定していない。しかし、福田も大蔵官僚出身のエリートとして、財界主流から相当の資金を提供されており、田中金脈のみを強調すべきでない、とする。

以上に加え本論文は、田中が田中―大平ラインを構築したことや、官僚を上手に使いこなしたことを明らかにし、それらすべてが日中国交正常化の成功につながったと論じている。また田中の選挙地盤確立についても論じ、それが中央での自由な活動を支えたことを示した。

本論文は田中角栄研究の水準を飛躍的に高めたものであり、博士（法学）の学位を授与するにふさわしいものであり、学界の発展に資するところが大きく、特に優れた研究であると認められる。

また、平成26年2月3日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を

行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。